

第1回 あけぼの大豆現地研修会

平成29年8月3日（木）
身延町あけぼの大豆振興協議会

1 今年度の気象状況

関東甲信地方1ヶ月予報（7/27日気象庁発表 7/28～8/28までの見通し）

- 気温と降水量は平年並み
- 期間前半（7月下旬～8月上旬）は湿った空気の影響を受けやすく、日照時間は平年並みか少ない見込み

2 町試験ほ場の試験内容について

（1）安定生産、品質向上に向けた施肥の検討 旧ほ場、新ほ場

➤ 目的

大豆（えだまめ）の収量や品質向上のため、肥料の種類や施肥時期の違いによる効果を確認し、あけぼの大豆の特性を活かした施肥を検討する。

➤ 試験内容

- 旧ほ場（栽培2年目 22a）→ 主に大豆栽培

肥料の種類（化成13号、石灰窒素、肥効調節型被覆尿素肥料[L-Pコート]）、施肥方法の違いによる収量、品質向上の効果確認

1	基肥なし+ 追肥(LPコート)	2	基肥(化成13号)+ 追肥なし
3	基肥(石灰窒素)+ 追肥なし	4	基肥(化成13号)+ 追肥(大粒尿素)

全ての区：合計で窒素成分合計 3kg/10aになるように施肥

● 新ほ場（栽培 1 年目 15a）→ 主にえだまめ栽培

1	肥料なし
2	基肥（石灰窒素）+ 追肥(亜りん酸：土寄せ時 2g/m ²)

(参考) 亜りん酸 (亜りん酸粒 2 号 水溶性りん酸 10%)

- ・効果：生育促進、粒肥大促進など
- ・りん酸と比べ、土壤への吸着が少ないため、大豆が吸収しやすい

(2) 摘芯による草丈抑制、収量増加の検討 新ほ場

➤ 目的

草丈を抑え、収穫作業（脱莢・脱粒）の効率化を図るための、
摘芯（主茎の先端を摘む）の方法、時期及び効果を確認する。

➤ 試験内容

摘芯時期（初生葉展開時、本葉 5 枚頃、開花前）、摘芯なし
収穫時の草丈、莢数、収量、百粒重、収穫の作業性を調査

(3) ちりめんじわ発生低減対策の検討 新ほ場

➤ 目的

えだまめの莢表面や大豆表面にしわが発生する要因を確認、対策方法を
検討する。

表2 しわ粒（子実）の種類

名称	ちりめんじわ	亀甲じわ
特徴	ヘその反対側の種皮が しわになる	種皮が亀の甲羅状に隆起す る。

〈しわ粒の発生要因〉

品種、栽培管理、天候、施肥、乾燥など

➤ 試験内容

- ① しわ有り、しわ無しをは種し、収穫時にしわの有無を確認
- ② しわが発生する原因の一つである収穫

(4) 農薬散布の省力化に向けた散布方法検討

➤ 目的

農薬散布の労力軽減

➤ 試験内容

- ・水稻の病害虫防除に使用する鉄砲噴口（永田製作所ステンレスライトK170）を使用し、農薬散布の省力化を検討

(5) えだまめ、大豆栽培に導入可能な新規品目（作型）の検討

➤ 目的

中山間地域であけぼの大豆栽培と組み合わせ可能な野菜品目、栽培法を検討し、地域への普及を図る。

➤ 試験内容

● スイートコーン（抑制）

品種：ゴールドラッシュ 90（サカタのタネ）

は種：7/**下**～8/上 → 収穫目標 11/上

3227 黒穴あきマルチ使用 株間 30cm × 条間 50cm (3.5 本/m²)

施肥：基肥 1.5kgN/10a (CDU たまご化成 555 10kg)

● だいこん

品種：冬自慢

は種：8/中～下 → 収穫目標 11/上

株間 24cm 条間 60cm (6 本/m²)

施肥：基肥 1.0kgN/10a (エコ化成 8 号 12.5kg)

3 今後の管理について

(1) 追肥

- ・根粒菌の活性が低下する開花期以降（8月中旬以降）に窒素が必要
- ・開花期以後1ヶ月間、茎葉の生長と開花結実を同時に行うため、養分吸収量が大きくなる。
- ・土の養分が不足している場合には、追肥の効果が期待できる。
 - 時期：開花前
 - 施用量：10 アール当たり窒素成分で2kg (N K化成 17号の場合、約10kg)
 - 土壤が乾燥している際は、施用後にうね間かん水をすると効果が高まる。

(参考)

窒素 (N)

- ・根粒菌の窒素固定は、出芽後3週間頃より始まるため、それまでは土壤中の窒素（元肥等）が必要
- ・たい肥等を施用し、地力窒素を高め安定的に供給する必要がある。

(2) かん水

- ・開花期から着莢期、子実肥大期にかけて水の要求量が高く、この時期のかん水により增收の効果が高くなる。かん水はうね間に使う。
- ・開花期以降に降雨がなく、土壤が乾燥すると
 - 落花や落莢が多くなる
 - 莢重や子実肥大が低下する。→養分が茎に残り、収穫期に青立ち(茎が枯れない)が発生する。

➤ 目安

- ・開花から登熟期初期に晴天(降雨が無い日)が7~10日以上続くとき
- ・土が白く乾いて、日中、葉の反転がほ場全体の50%以上見られるとき

➤ 方法

- ・日照りが続くような時には、5~6日間隔で数回、気温・地温が下がる夕方から

夜にかけて水を入れる

(4) 病害虫防除

➤ 病害虫防除の基本～ 早期発見、早期防除

- ・開花が終わり頃から(8月下旬～9月上旬)、^{さや}莢を食べる虫(ダイズサヤムシガ、マメシンクイガ等)が増えるため、薬剤散布により防除を行う。
- ・消毒は、7～10日間隔で2～3回、莢及び周辺の葉を中心にていねいに散布する。

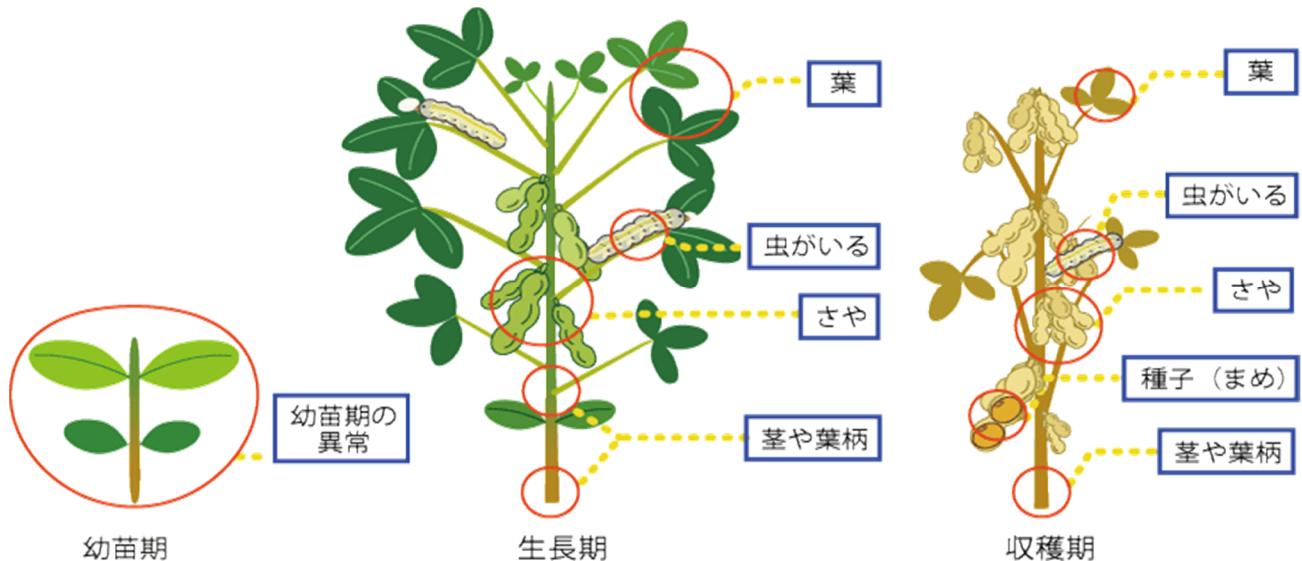


表1 あけぼの大豆(えだまめ)薬剤散布の例

散布時期	薬剤名	対象	使用方法
開花始め (8月下旬頃)	スミチオン乳剤	マメシンクイガ等	1,000倍・収穫21日前・4回
開花終期 (9月上旬頃)	ゲッター水和剤	紫斑病	1,500倍・収穫14日前・3回
	トレボン乳剤	マメシンクイガ	1,000倍・収穫14日前・2回
開花終期 (9月中旬頃)	アミスター20 フロアブル	べと病	2,000倍・収穫7日前・2回
	トレボン乳剤	マメシンクイガ	1,000倍・収穫14日前・2回

- ・天候や病害虫の発生状況により、追加散布を実施する。

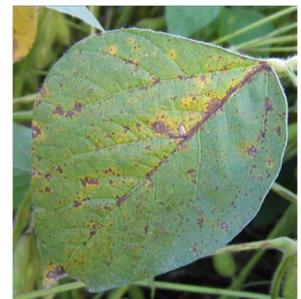
あけぼの大豆（えだまめ）の主な病害虫と防除方法

1 病害

(1) 紫斑病 (しほんびょう)

➤ 特徴

- ・種子で伝染しやすい
- ・葉や莢に紫黒色の斑点



➤ 防除法

- (1) 開花期以降（9月上旬～9月中旬頃）に薬剤を散布する。
- (2) 適期収穫し、早く乾燥する。

(2) 白絹病 (しらきぬびょう)

➤ 特徴 連作により発生

茎葉がしおれ、枯れる



➤ 防除法

- ・発病初期に薬剤を株元に散布（灌注）する。
モンカットフロアブル 40 1,000 倍 3 リットル / m²散布
- ・水稻との輪作、土壤酸度 (pH) を 6.5 程度に調整、深耕など

2 虫害

(1) 莖食入害虫 (ダイズサヤムシガなど)

➤ 特徴

- ・幼虫または蛹で越冬し、初夏～秋に3～4回発生
- ・幼虫が若い葉をつづり合わせて食害し、成長した老齢幼虫が莢や莢（子実）も食害する。



➤ 防除法

- ・幼虫が莢や莢の内部に食入すると、薬剤が効かなくなるため、

幼虫のふ化時期～食入開始時期（開花終り）に7～10日間隔で
2～3回殺虫剤を散布